

アイオワ大学補完代替医療 (CAM) の現状報告

百々雅子 山梨県立大学看護学部看護関連科学領域

補完代替医療(CAM: Complementary and Alternative Medicine)とは、いわゆる西洋医学の発達してきた欧米で西洋医学以外の医療の総称としてつくられた名称だが、これらの医療は30年ほど前から欧米の医療のなかで市民権を得て、大きな変化をもたらしている。

アメリカではNIH(国立衛生研究所)のなかのNCCAM(国立補完代替医療センター)という機関で本格的な研究が行なわれるようになったほどだ。

中心から離れたアイオワ州での実態はどうか。CAMが教育、研究、臨床で、また大学を出た街中で、どのような現状にあるかを見聞させてもらった。

■アイオワ大学へ

アイオワ大学(The University of Iowa)は総合大学で、毎年3万人の学生が入学、11学部を擁し、800万m²という広大な敷地をもつ。敷地には各学部の建物だけでなく大学病院や研究所、映画館、音楽ホールなどがゆったりと建てられている。まさにアメリカの総合大学という言葉がふさわしい。

看護学部棟は学内を流れるアイオワ川の畔にあり、ここに学部学生800人、そして修士課程と博士課程の学生や教員を合わせて1000人以上が出入りする。

私は看護の専門家でなく社会学系の教員であるが、アロマセラピーや気功を大学やがんの患者会、産業の場などでリラクゼーションとして指導していて、CAMの置かれた状況には一方ならぬ関心を寄せている。8

年前に訪問した折しも、学内だけでなく、街のCAMの学校にも訪問して話を聞き、技術を伝え合った。

なお、その学校は今回訪問時に場所を移してはいたが顕在で、地元の新聞によると、さらに発展して地域の教育センターの役割をもつことになっているとある。CAMはますます人々に受け入れられている印象だ。

まずは大学内の教育はどうなっているのかから紹介したい。

■大学病院のCAMの研究と実践

看護学部の学生の実習先のひとつでもある大学病院に勤務するニズリー医師(内科)にレクチャーをしてもらい、CAMの学内での研究状況と臨床でのケアの現状を知った。

研究については、NIHから6年間基金を得て「がんと免疫システムへのCAMの関与」というテーマで進行中であり、がんや免疫系への作用を「ハーブ」と「心身の相関」という2つの視点から見ていくとのことだ。

「ハーブ」ではセントジョーンズワートとエキネシアの2種類が取り上げられている。もう一方の「心身の相関」については、リラクゼーションなど心身に働きかける効果が、すでにいくつかの方法でデータ化されている。

一方、病院内でのケアの実践については、現在数種類のCAMが使われているという。具体的には、鍼灸、カイロプラクティックとオステオパシー(いずれも整骨療法)、瞑想、マッサージ、ヨガであり、このうち週毎に2コースが開かれて患者に利用されている。



大学のシンボル旧州議事堂

担当者の勤務形態は、フルタイムもあればパートもいるということだが、その違いは、院内にすでにほかの仕事(たとえば看護師)をもっているかどうかだということだ。もっていないと院外からその時間にやってきてパートで働くことになる。

ニズリー医師は、この臨床でのケアとしてのCAMの種類を話すとき、担当者の男女別も明確にした。医師自身が女性であるためか、聞き手の私がこのような医療におけるジェンダーにも関心をもっていることを見越してのことだったのだろうか。

ちなみに上記のうち女性が担当しているのはカイロプラクティック、オステオパシー、ヨガであるという。また人気の高いのはマッサージや鍼灸とも聞いた。

■医療系共通科目としてのCAM

次はCAMの学生に対する教育であるが、アイオワ大学での医療職を目指す学生に対するCAMの教育はすでに1998(平成10)年から始まっている。

対象としては看護学部だけではなく、医学部、薬学部の3学部であり、3学部共通のコースの設定をすることになったため、时期的な調整が難関だったが、毎年1月が適当と判断され、現在この時期に定まってきている。時間数としては丸一日の授業が1か月続く、相当な集中コースである。

内容は、鍼、ハーブ、一般論の3項目に分けられていて、講義と実践が半分ずつ。臨床では、療法家が主に実践をして見せる方法がとられて



ハート、フリール両名誉教授



アイオワの街並み



マウワー学校代表の新聞記事

いて、選択科目であるこのコースの受講者は毎年確実に増加しているという。

二ズリー医師の次に会った看護学部のブッチャー先生は、そのコースの講義の一部を担当しているといい、講義資料を見せてもらった。

講師は各学部から派遣して、それぞれの専門的見地からの視点を導入することになっていて、学生たちは自分の専門以外の視点を聞くことができる。アイオワ大学では、そのようにしてCAMを巡る、医療系のなかの学際的講義を実践しているのだそう。

■看護学部でのCAMの教育・研究

翌日、看護学部をすでに退官した2人の名誉教授にも、看護学部内でのCAMの研究と教育に関して話を伺った。

1990年代後半にはCAMが、先の3学部共通のコースとは別に看護学部独自のカリキュラムにも入り、お2人はヒーリングタッチやマッサージセラピーを教えてこられた。学生にデモをして学生自身がもっている心身の諸症状を軽減もしくは癒していく方法を取ったという。これがもっとも効果的な教育法だと思つとも聞いた。

両先生の研究は、このような心身相関的な方法によってホリスティックな癒しを目指す内容を扱う。これはNIHの分類によると、バイオフィールド(bio-field)と呼ばれる領域のひとつで、同じ領域には、カイロプラクティック、気功、自律訓練法などが含まれているのだそう。研究は退官後の現在も続いていると

いう。

■一般の人からのCAMの受け入れ

大学内で基礎的な教育を受け、さらに関心をもてば外の学校で本格的に学ぶことができるそう。現役で働いている看護師や介護師の人たちもそこで学び、技術を身につけることができるという。街の新聞のなかには、よくあるCAMの学校の広告ではなく、CAMについてきちんとした議論をする記事があった。

学校の代表の一人、キャンディダ・マウワーさんが、そこに述べている内容は、CAMの、医療教育の場でなく、一般の人たちからの受け入れられ方を示す好例だと思うので、ここに少し紹介したい。

「CAMのほとんどは実際的でわかりやすい。骨の歪みは調整されたほうがいい。栄養は身体の細胞レベルの健康に関わる。筋肉の緊張はマッサージでほぐすることができる。など。ただ、これが目に見えない領域のことになったとたん、わかりにくくなる……瞑想や気の世界がそうだが……ときに“奇妙な(weird)”療法と呼ばれる。」

西洋人たちにとって、CAMのこのような見えない世界は、やはりいまだに受け入れがたいのだ。日本のように禅寺で座禅という瞑想が体験できたり、合気道など「気」を読む武道があったりする土壌がないため、西洋的なこの領域の受容の難しさは、私たちとは比べものにならない。

それでもマウワーさんは続けて、「この不可視な世界は(西洋の)心理学にも実際にあるし、その有効性はさまざまに実証されつつある。奇妙

と映るかもしれないが、強力(powerful)なのだ」と主張している。

この学校が、先に述べたように、市民の教育を担う学校として学生数を増やし、市から期待されて発展しているのはCAMの一般的受け入れが高まっている何よりの証であろう。

ヨーロッパでは主なCAMの利用は医師の許可や推奨さえあれば、保険がきく。一方、アメリカは健康保険制度が皆保険制度ではないので、その保険適応をもって、CAMの受容と社会的浸透の指標にはできない。そもそも欧米のCAMへのニーズは医療の受け手が作り出したものである。

だが、一般の人々にとって、CAMは部分的に文化的な理由で受容の難しさも残している。CAMが異文化圏でつくられた医療を含んでいるからなのは、アイオワの学校に関する新聞記事が示すとおりである。アイオワでのこの反応も、カリフォルニアやニューヨークなどの国際都市では、もっと受容的なものになるだろう。多くの異文化が日常的にそこにあるからだ。

しかし養豚舎とトウモロコシ畑を郊外とするアイオワの小さな町にあるアイオワ大学にも、CAMが、教育や研究にもすでに入り込んでいるという現実を見る限り、街にあるCAMの学校の発展とともに、一般の人々にさらに広く受け入れられていくのは確実と思われた。

百々雅子 ● どどまきこ

山梨県立大学看護学部

〒400-0062 山梨県甲府市池田 1-6-1